

学術出版社 2025G 社の調査報告

同志社大学 社会学部 社会学科
藤本研究室
鳥居 大暉

今回の調査対象である 2025G 社は学術出版社であり、法学、経済学、商学、政治学、社会学、心理学などの学問分野を広く扱っている。本調査では、以下の 3 つの質問項目に沿ってインタビューを進めた。「編集者の働き方」、「導入する AI を取り巻く環境」、「学術出版業界と AI の今後」の 3 つである。

まずは編集者の働き方について述べる。G 社の編集者は書籍出版に関わる企画立案や校正などの様々な業務を、基本的には 1 人で担当している。書籍の学問分野については担当分けがあるが、それ以外の分業はあまりしておらず、彼らはマルチタスクの典型のような仕事をしていると言える。ただし、校正業務に関しては外部の校正者や非正規の校正プロパーに、その一部を任せられることもある。また、時期によって業務の繁忙が激しく、1 年を通して仕事量が一定でないことが大きな特徴である。特に、決算の締めがある年末や大学の先生からの原稿の持ち込みが多くなる夏休み明けおよび春休み明けは業務量が増加する。

AI の導入については、現在、AI を普段から使っている社員やデジタル・インターネットに詳しい社員で構成された十数人規模の AI チームによって実験中であり、企業の提供する AI アプリケーションの有料プランを登録して利用しつつ、主に編集・校正の機能において今後どのように AI を導入していくべきか検討している段階である。G 社が AI 利用を決めたきっかけの 1 つとして、書籍の購入数の減少が挙げられる。かつてターゲット層だった大学生が書籍をあまり購入しなくなったため、同じ本でも以前よりは売れなくなり、次の買い手に向けて様々な種類の本を多く作って売れなくなった分の穴埋めをする必要がある。しかし、現在の学術出版業界はあまり景気が良くなく今後の成長が確実とは言えないために、現場に人員が足りていない一方で採用を増やすのは難しく、人員を割けないという現状がある。そこで、AI に日常業務をサポートしてほしいという思いを持ったのである。今のところ AI は誤情報の出力や専門知識の履き違えなどの不具合が起こる頻度が高いことや、情報漏洩、著作権侵害などに関する問題もあってか、編集や校正そのものの業務は AI には任せられない。しかし、g 氏は企画立案や基礎資料を作成したり、大学の先生にその人の専門分野に関する書籍の執筆を依頼する際に、全国の大学のシラバスを調査して各々の学問の講義例をリストアップしたり、類書・関連書籍の目次を調べて特徴の列挙をしたりするといったような下調べの作業には活用できると考えている。

今後について、まず、g 氏は AI との協働を上手く行うためには、社内で試行錯誤していくべきだと考えている。AI 技術をただ享受するだけでなく、自分たちのビジネスにどのように活かすかという点について考えるうえでも積極的に使っていきたいという。また、AI と学術出版社の連携の可能性について具体例が挙がっており、それは、過去の書籍や情報を AI の力を用いて電子化することや、長年積み上げてきた典拠や根拠のある G 社の情報を AI に学習させることなどである。

最後に、AI や電子書籍が台頭しており出版社以外の業者も出版業界に参入しやすくなっているという現状の中で、出版社の業務で今後問われる能力についても g 氏に伺った。g 氏は、その点につい

て校正や編集、企画の能力が今までより問われるであろうと答えた。校正で AI を使うときには、引用や参考文献の確認の段階で不具合が起きてしまうことがあるため、人の手による確認は現在でも重要である。また、G 社は学会や大学の先生方との多種多様なネットワークが大きな強みであり、その関係性を持ったうえで行う編集だったり、企画テーマの模索だったり、G 社の価値を発揮できる点である。このようことがあるために、g 氏は校正や編集、企画の業務は AI でもまだまだ対応できない内容だと考えている。



***イメージイラストは AI で生成**